

一心と三心

王本願たる所以

如来は十方衆生の煩惱業苦を、大悲の内容として感じ給い、一切群生を荷負して「設我得仏」と成仏の誓いを発し、直ちに久遠の愛児を生死海に尋ねて、「十方衆生よ」と招喚したもうた。

如来は今や、十方衆生を招喚して、その久遠の願意を示し給うのである。由来、第十八願は、四十八願中の王本願とよばれてきた。四十八願悉く聖なる法身によつて顕現した、菩薩の大悲の願心であることに変わりはない。然るに十八願が王本願と呼ばれる所以は、十八願こそ、如来自然の胸底に秘められた、純粹真実なる如来の大生命、それ自体の表現だからでなくてはならない。四十八願と雖も、若しこの第十八願の真意を失うならば、四十八願は、全てその意味を失う程の肝要、絶対尊重の願でなくてはならない。

而して、かかる重要な願の意味は、「設我得佛 十方衆生」に次いで出てくる「至心信樂……」以下の文字が顕すものでなくてはならない。すでに「設我得佛」の文字は、四十八願を通じて見出される文字であり、「十方衆生」の文字も亦、十九願、二十願にも見えている。然れば、十八願の王本願たる真意は、「至心、信樂」以下の文字でなくてはならない。以下、かかる重要な文字について、味読せんとするものである。

一心の華文

然るに御本典信巻に於いて、聖人はこの第十八願の、至心、信樂、欲生の三心を積するに先立って、

「問う。如来の本願、已に至心・信樂・欲生の誓を発したまへり。何を以ての故に、論主一心と言うや。」

と自問を出しておられる。

論主とは、天親菩薩のことである。すでに天親論主は、浄土論において、巻頭直ちにその信念を告白して、

世尊我一心

歸命轟十方

無碍光如来

願生安樂国

と、宣説せられた。この浄土論こそ、実に純正浄土教の礎石たるべき、千古不磨の聖典であり、指針である。何人と雖も大無量寿経を学んで、如来の真意に触れんとすれば、これなくしては為し得ないと云つていいほどの位置を占めたものが、この浄土論である。

されば、聖人は、御本典信巻の序文に於いて、

「広く三経の光澤を蒙りて、特に一心の華文を開き、且く疑問を至して、遂に明証を出す。」

と讚嘆していられる。一心の華文とは、浄土論のことである。聖人は、この浄土論に値うことが出来たことを、衷心より感謝し、歡喜せられたのである。

その浄土論には、領解の信心をさして「世尊我一心」と宣べておられる。この一心と、「至心、信樂、欲生」の三心とは、如何なる關係を有するかと云うことは、当然問題とならなければならぬ。即ち、

「問う。如来の本願すでに至心・信樂・欲生の誓いを発したまへり。何を以ての故に論主一心と言うや。」

との問いが出されたのである。一つは、如来の聖意であり、一つは、大地に於ける領解である。

この如来の願意と、論主の領解の中に立つて、答えられなければならない。聖人はこの自問に対して、自答して曰く、

「答う。愚鈍の衆生をして、解了し易からしめんが為に、弥陀如来、三心を発したもうと雖も、涅槃の真因は唯信心を以てす。この故に論主、三を合して一と為るか。」

一、愚鈍の衆生をして、解了し易からしめんが為に。

二、弥陀如来、三心を発したもうと雖も、涅槃の真因は唯信心を以てすの二つである。

愚鈍の衆生

第一は、愚鈍の衆生に対する大悲であり、第二は、信の自証に於ける断定である。2

憶うに、至心、信樂、欲生と三心の誓いを聞いたのみでは、愚かなる衆生は、正しい領解に困ることである。然るに論主は、世尊我一心を深信せられた。この一心の信の告白こそ、そのまま、信をして解了し易からしめられる。誠に浄土教が、信心一つを高調して、一心一向の旗色を鮮明ならしめることが出来たのは、この天親論主の論の賜であつた。如何に多くの「愚鈍」の衆生が、これを通して、如来の信に導かれて助かつたことであらう。救はれたことであらう。然しながら、この愚鈍の衆生とは、かかる一切衆生のことであらうか。若し聖人にして、他を見下して「愚鈍の衆生」と言はれたとすれば、聖人日頃の態度とは異つている。

蓋し、聖人は如何なる場合にも、その自証の告白より外、なされぬ人である。この愚鈍の文字も亦、聖人の自照の天地に於ける告白でなければならぬ。即ち、聖人こそ、愚禿の世界において如来の信に覚められたのである。我等はすでに、かかる聖人の信の世界を不断に伺つて来た。誠に浄土教は、智者になつて悟るのでなくて、愚者と覚めて救はれる道であつた。「愚鈍にさめてこそ、解了するに易き道」であつた。

涅槃の真因

然し、この天親論主の告白は、論主の自証において、愚かなるものに領解を易くしてやりたい、と云うような伝道意識があつたであらうか。蓋し、それは論主より教を聞く者の謙虚なる態度であり、心境であつて、論主の教化意識ではない。既に論主は「世尊我一心」と我の信を、世尊即ち教主釈尊に対して、告白せられたのである。何で、

愚鈍の衆生をして、解了し易からしめたい等の、教化意識の不純物が混入していよう。必ずや、そこには、もつと根本的な何ものかが潜んでいなければならない。かくの如く考へて眼を次に移す時、我等は其処に、本質的な、聖人の断定に接することが出来る。即ち、

「涅槃の真因は唯、信心を以てす。」
との文字である。

涅槃とは大般涅槃の仏果である。仏教徒、否、一切衆生によつて必ず求められるべき、唯一絶対の究竟的自覚、即ち如来となり、仏陀となつて、絶対人格を完成する。この涅槃の大覚には、如何にして至り得るのであるか。これに対して、

「涅槃の真因は唯、信心を以てす。」

との明かなる信証断定を示されたのである。蓋し涅槃に至る道については、古来色々な道が示された。戒定慧の三学と云い、六度と云い、八正道と云い、その他、八萬四千の法門悉く、涅槃に至る道ではある。而してかかる諸行を説かれるに当たつても、「信」は必ず説かれてあつた。聖道と云い浄土と云う、何れにせよ、信なくしては、宗教はあり得ない。

然しながら、一切の諸行を揚棄して「信」を唯一絶対の立場にまで引上げ、「唯信独達」、信心一つにて佛になり得る。信一つにて足りるとの、信一元の断定は、聖人によつて、始めてなされたのである。

即ち、信は諸行と並ぶものでなくて、諸行を可能ならしめるものでもなくて、信それ自身が、諸行を廃捨して、独立に、絶封に、涅槃への唯一の真実の因となるのである。

「涅槃の真因は唯、信心を以てす。」

この断定こそ、天親論主の真意に合するものであり、天親論主の教によつて、如来の聖意を正しく領解せるものである。論主の「世尊我一心」の一心こそは、この唯一絶封なる信を示されたものである。

我等は、論主の教によつて、愚鈍の機を深信しつつも、遂に如来に救はれて、大般涅槃に至り得るのは、涅槃の真因は、「信」の一心のみであるとの、深信に到達し得るからである。聖人が、特に論を「一心の華文」として、崇仰せられた所以である。我等は教主なくして、信を得ることは出衆ない。しかも、教主の教を模倣し、鵜呑みにすることは、教主に値い、教主に忠実である所以ではない。

聖人にとつて、論主の教は絶対であつた。然も、如来の本願も亦絶対であつた。この救主の聖なる声と、教主の懇ろなる教示との間に立つて、あくまで自己を見失わずして「愚鈍」を諦観しつつ、然も絶封に、大安心境を求め、成佛の志願を完うせんとせられる、求道精進の態度は、遂に、この「涅槃の真因は、唯信心を以てす。」との断定を、三心一心の問答において、可能ならしめたのである。

この聖人の信境こそ、天親菩薩の教によりつつ、その幽意を、発展發揮せしめて、論主を超え、いよいよ如来の本願を、一切群生の大地のものたらしめられたのである。

字訓

親鸞聖人は、その宗教的体験の確証に依って、信を絶対的立場にまで高揚して「涅槃の眞因は唯、信心を以つてす。」と断定せられた。

然るに聖人は更に、それに止らず、次に、至心、信樂、欲生の三心の字訓をあげて、いよいよ如来の眞実を明らかにせられるのである。

即ち曰く、

「私に三心の字訓を窺うに、三は即ち一なるべし。其の意何となれば、至心と言うは、至は、即ち是れ真なり、實なり、誠なり。心は、即ち是れ種なり、實なり。信樂と言うは、信は、即ち是れ、真なり、實なり、誠なり、満なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なり。樂は、即ち是れ欲なり、願なり、愛なり、悦なり、歡なり、喜なり、賀なり、慶なり。欲生と言うは、欲は、即ち是れ願なり、樂なり、覺なり、知なり。生は、即ち是れ、成なり、作なり、為なり、興なり。」

以上の文を拝読して、聖人の意途を伺うに、聖人は、しばしば字訓釈によつて、その本質を顕わそうとせられた。然も、この三心釈に於いては特に念が入っている。然し、ここに最も注意しなくてはならないことは、かかる冷たき文字の研究があつて、その穿鑿を通して、聖人の信心が生れたのではなく、動かすべからざる、絶対の信が文字を発見したのである。

蓋し、文字には、それが持つ理念がある。信は不可称、不可説、不可思議の世界である。即ち、一言にしてこれを表わさんとすれば、平面死灰の無生命無内容の事実となつてしまう。しかもこれを唯、不可称、不可説、不可思議であると云つただけでは、それをすら、現はすことは出来ない。やむなく文字が持つ理念に托して、説くより外はない。言語によつて説き、説いて言語を離れるより外はない。

これを譬えて言えば、我等は、肉体に食物を摂る、食物をとるとは、体の栄養をとるのである。然し、栄養だけを抽象してとりはしない。又栄養だけがぶら下がつてはいない。実際には米を食ひ、野菜を食ひ、魚を食う。而して米にも、大根にも、魚にも用事があるのではない。もしそれらが、そのまま、とどこうれば大變である。

今も亦、文字が絶対であるのではない。従つて文字の訓を集めて、三心即一を証明せんとせられるのではなくて、文字に寄せて、不可説の信を顕わさんとせられるのである。而して、かかる努力は信そのものの内容を豊富ならしめ、その豊富なる内容を、更に信の腹によつて消化して、滋養の味を深からしめんとせられるのである。我らは今、極めて、手の入つた料理の食膳についた感じを持つて、聖人の努力を頂戴せんとするものである。ここに集められた文字は、先徳たちの所謂「俗典浅近の字訓」にすぎない。然し、道の達人は、死せる材料を生かして用うる。用うることによつて生かすのである。今も、死せる冷たき「俗典浅近の文字」が、彼岸の生命によつて生きてはたらくのである。

至心の字訓

「至心」とはまづこころであるが、至に對して、真、實、誠の三訓が施されてある。私はず、静かにこの三つの文字を念仏の中に凝視する。

真、実……真実、そして誠、凡そ一切の文字の中で、これほど深く、広く、而して尊いものを現はす文字があるだろうか。遠くは宇宙の廣大無辺なる、近くは人生日常卑近の生活まで、「真」の一字の中に包含せられ、天真と云い、真理と云い、真心と云い、真人と云い、これなくしては、一切が成立しない。絶対權威を持てる文字である。しかもこの文字が、あまりにも安価に取扱われ、平気で用いられている。何を真実と云ったか、如何なる場合に用いたか、畢竟、真実なる文字の使い方によつて、その人の、人生生活の探さを決定する。

至心とは、如来本願の中に浮べられた、第一の文字である。すでに、觀經の三心に於いては、至誠心、と示された。その至誠心を、善導大師は散善義に於いて、「至とは真なり。誠とは實なり。」と釈せられた。至は、至誠を作る。誠は、誠実を綴る。至誠も、誠実も共に真実を現はす。故に、至は真なりとの義訓が生れたのである。又真の字は「不虛仮也」(玉篇)で、真は轉訓すれば、實である。又、実の字は「実は誠なり」(廣韻)で第二の誠の字が出たのである。

「心」について、種と、実との二訓があげられた。玄義分に、「凡そ種と云うは即ち是れその心なり」と。この訓によれば、心とは種である。種とは、ものの実であるから、実こそ種である。我等、現前の一心こそは、過去久遠の業因によつて成れる実(果)であると共に、未来を生む種(因)である。

以上、至心に真、實、誠、種の四訓を施し、聖人はやがて、「明かに知んぬ。至心は、即ち是れ、眞實誠種の心なるが故に、疑蓋雜わることなきなり。」

と結ばれた。即ち、至心とは、眞實誠種之心である。一点濁りなき、純粹至純なる、真心そのものである。然も、それはやがて仏果に至るべき、種実である。まことに信心は、それ自身この一点、疑蓋の雜らざる真実そのものである。かかる至心に根ざさず、至心を体とせずして、いかでか、彼岸に至ることが出来よう。浄土に通ずるものは、唯、真実である。三世を徹貫するものも亦、まごころである。

信樂の字訓

次に信樂の字訓において、

「信は即ち是れ、真なり、實なり、誠なり、満なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なり。」

と先ず、「信」によつて十二訓を挙げられた。

信は、忠信である。忠信とは「誠心懿実」である。即ち、実という訓の生れたわけ。真は、さきの「至とは即ちこれ、真なり、實なり。」で、真はやがて信の訓となる。誠の訓は、信、真実を現はす当然の文字である。満は、実の訓で、実はものの満ちたかたちである。

極は、極成と綴り、因明(印度論理学)の述語で、道理に相違なしと、互に許す決定の時、用いられる言葉である。信は、道理至極の信である。「極」の意を持つている。至極、極上の世界に違ひない。

成は、成長、成就等の成で、成々発展を現はす文字であり、満足成就と使はれる文字である。信は確かに満足成就の相であり、更に生々発展創造の根底である。私ばかりの如く解する。或は、極成の成で、決定の意となり、又は誠と同音であるから「成」を転じて信の訓とせられたと云う先哲の釈も肯かれる。

審は、誠の訓である。転じて信の訓に使はれたのである。審とは、審らかに決定する義で、確かに信をあらはす。

験は、明かに考へること、体験の験で、疑いなき信の相、信の訓である。

宣とは、「明」なるかたちである。宣に用といふ訓がある。その用の字は、信の訓であるから宣、用、信で、信の訓に宣と出されたのである。

忠は、忠信の忠で、信の本訓である。

次に、信楽の「楽」について、

「楽は即ち是れ欲なり、願なり、愛なり、悦なり、歓なり、喜なり、賀なり、慶なり。」と八訓があげてある。

第一の欲であるが、楽は「魚教の切、欲なり」（玉篇）で、正しい訓である。この場合の欲は、「ねがう」であつて、貪欲ではない。

願は、欲の字の註で、楽の字の訓である。即ち、「ねがう」である。

愛は、めづる、めでねがうであつて、欲の字の註であるから、転釈されたのである。即ち楽とは、めでねがうことである。よく法味愛樂と使はれている。信樂を、懐かしく現はした言葉である。

悦、よろこぶ、悦の訓が楽であるから、楽の訓に悦を転用されたのである。6

以下の歓、喜、賀、慶は皆、よろこぶと云う字で、楽の字の親類ばかりである。聖人は、楽の字の親属を全て駆り集められたのである。

以上八訓の中、欲、願、愛の三訓は、楽、「ぎよう音」の訓で、ねがうであり、下、悦、歓、喜、賀、慶の五訓は、楽、らく音の訓である。楽の字には、ねがいと、らくとの二つの内容を持つ、願（願生の願）と、歓喜との、調和一体の境地である。即ち成就文の、信心歓喜と、願生彼国との一体を顕はさんとされるものである。

以上、信楽の二十文字を結んで、

「信楽は即ち是れ、真実誠満之心なり。極成用重之心なり。審験宣忠之心なり。欲願愛悦之心なり。歓喜賀慶之心なるが故に、疑蓋雑ることなきなり。」と結ばれた。

信楽とは、真実誠満の心、即ちまことの満ちた心である。忠信にして二心なく、如来に生きる相である。信は、真真心の中にみなぎる満足である。

極成用重の心とは、如来の本願名号を聞いて、道理の極成を承認し、信樂し、決定し、やがて本願を信用し、敬重し、尊重するに、一点の疑いなきことである。

審験宣忠の心とは、つまびらかに、明らかに、確実に、疑いなく、如来本願を信樂覚知することである。一切の疑い、思慮分別を超えたる体験の事実である。

欲願愛悦の心とは、信樂の天地は、平面死灰の単なる思いにあらずして、よろこびに動く願である。願作佛心であり、願生安樂国の確信である。貪欲を否定して動く願である。生命必然の、成々発展の力であり、無限の彼岸を孕んで、生きるよろこびで

ある。願は誠に、三毒煩惱の大地に、双葉を切った如来の若葉（因）である。正定聚不退の菩薩の誕生である。歡びはここにのみある。

歡喜賀慶の心とは、信心歡喜の天地を、重ねて出されたのである。

以上、信樂とは、真実心であり、道理の尊重決定であり、明らかなる体験であり、未来への創造の願であり、無限のよろこびである。故に、信樂とは一点疑蓋の雜らざる心である。

欲生の字訓

つぎに、欲生の字訓においては、

「欲生と言うは、欲は、即ち是れ願なり、樂なり、覺なり、知なり。生は、即ち是れ成なり、作なり、為なり、興なり。」

と欲について、四訓、生について四訓を出された。

第一の「願」は、「欲は願なり」で、欲の正しい訓は願である。

樂は「樂は欲なり」で、転じて、欲は樂である。樂（ねがう）とよむ。

覺、知は「知は覺なり、欲なり。」（廣韻）とあり、皆、親族の文字だから、欲の訓に覺、知の二文字をもつて来られたのである。即ち欲うとは、真に「さとる」ことであり、「しる」ことである。

次に生の訓について第一に、成は、成就の成、成長の成で、「生」の字がもつ意味を、現はされたものである。「生きる」「うまれる」ものは成長し、成就する。生に成の訓をつけられた意であろう。

次に、作であるが、生には作の意がある。この作には、（廣韻）によつて、聖人は「則羅の反、則落の反、蔵落の反、為なり、起なり、行なり、始なり、役なり、生なり。」と註釈を入れておられる。

はじめに反切を出されたのは、音を示すためで、「則羅の反」は佐で、作の音は「サ」であると云うこと。「則落の反」は「サク」「蔵落の反」も「サク」で、作の字の音はサクである。この作には、先ず「為」の訓がある。為は「なす」「なる」と読む。即ち、作と同じである。

次の起は、起つてことを成すことで、起に作す意がある。行は、行なう意で作すの意、始は、事を始めること、役は使役の意で、使ひて作す、使われて作す、意味である。最後の「生」を作すの訓に使つてあるのは、作の字の訓に生の字訓を入れて、欲生の生にそなえられたのである。欲生の生に作の訓があるのではないが、作の字に生の訓があるから、転じて、生に作の訓をあげられたのである。つまり、欲生の生には「なす」の意があることを現はされたのである。

つぎに「為なり」と挙げられた。生に為の訓はないが、前の作の字の訓を転用されたのである。

興は、「興は作なり」を転用して、生の字の訓にされたのである。興は、作興とか、興起とかで「おこる」こと、信は、如来本願よりおこるのである。

以上を結んで聖人は、

「欲生は即ち是れ、願樂覚知之心なり。成作為興之心なり。大悲廻向之心なるが故に、疑蓋雑ること無きなり。」と、結釈せられた。

即ち、欲生とは、願樂覚知の心である。願樂覚知とは、如来本願によって、往生を願樂して、仏果を得ることを、覚知することである。

次に成作為興の心とは、死滅・枯涸等の心と違って、生々発展・創造不退、未踏の天地に往相する希望の信、偉大なる未来を持つ、信の世界を示された文字である。而してかかる欲生は、本願力によって興起し成作するのである。

而して、この欲生の釈においては、特に「大悲廻向の心なるが故に」と加へられた。欲生の心は、

如来の心なることを示されたものである。

聖人は、ここにも亦、「疑蓋雑ることなきなり。」と結ばれた。

一心

以上、至心、信樂、欲生の字訓釈において、三心共に最後に「故に疑蓋雑ることなし。」と同一の言葉で結ばれた。この聖人の意図は、つぎの結文において更にはつきりする。曰く、

「今、三心の字訓を按ずるに、真実の心にして虚仮雑ることなし。正直の心にして、邪偽雑ることなし。真に知んぬ。疑蓋間雑無きが故に、是を信樂と名づく。信樂は即ち是れ一心なり。一心は即ち是れ真実信心なり。是の故に論主、建に一心と言えりるなり。知る応し。」

以上三心について、三十二文字を連れ来たつて、詳細に味わつて来られた聖人は、遂に、三心共に「真実心」であり、「正直心」であつて、虚仮、邪偽にあらざる、疑いなき心であるが故に、「信樂」と名けるとして、信樂一心の中に、三心を撰取してしまわれた。信樂は一心である。一心は、真実心である。天親論主はかくして、「世尊我一心」と告白せられたのである、と明証されたのである。

我等は今や、この豊富なる料理によつて、信の味を頂戴したのである。三心即一の義をこれで了る。

願の意

以上、至心、信樂、欲生の三心の字訓について味讀して来た。而してその帰結に至つて、

「今三心の字訓を按ずるに……」

真実の心にして、虚仮雑ることなきなり。

正直の心にして、邪偽雑ることなきなり。」

と結ばれ、疑蓋のない心であるが故に、信樂と名づける。信樂は一心である。一心とは真実信心である。この故に天親論主は、はじめに「一心」と言はれたのであると、三心即ち一心を、明らかにせられたのであつた。

然るに聖人は、三は即ち一と、一應結んでおいて、更に、一心より三心を導き出さんとするものの如く更に、

「又問う。字訓の如き、論主の意、三を以て一とせる義、其の理然るべしと雖も、愚悪の衆生の為に、阿弥陀如来、己に三心の願を発したまへり。云何が思念せんや。」と、又も自問を出しておられる。

至心、信樂、欲生の三心は、聖なる如来の願心そのものであり、一心は、大地に生きる者の領解である。何故に、天親は一心と領解せられたか、それを解かんとするの努力が、三心の字訓釈であつた。一心の領解を以て正しいとすれば、如来は、何故に「信心」のみを誓われなかつたのか。何故に信心一心を誓わずして、三心を誓はれたのであるか。即ち、三心の誓いを、一心として領解せられたる、天親の態度は正しいしかも、如来の三心の誓いは、絶封に無視することは出来ない。一心と領解すべきものを、三心と誓はれた所には、其処に深い意味がなくてはならない。これ即ち、

「又問う。字訓の如き、論主の意、三を以て一とせる義、其の理然るべしと雖も、愚悪の衆生の為に、阿弥陀如来、己に三心の願を發したまへり。云何が思念せんや。」との問いが出された所以である。

聖人は、今や、一心の領解に立つて、如来の願意を窺がおうとせられるのである。憶うに、生死海に生きる衆生の上に、一心の領解を可能ならしめるためには、如来の上には、三心の誓がなくてはならぬのであらう。我等は謹んで、聖人の教を通して、如来の願意を知らんとするものである。